

【エッセイ】

知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む

マレーシアは、世界のさまざまなものを内に取り入れ、新しいアイデアを常に世界に向けて発信している社会です。

植民地化やそれ以前の経験から民族混成社会として形成されたマレーシアは、世界遺産として認められるほどの民族的多彩さを持つとともに、イスラム経済の分野で世界を先導しようとする積極性も備えています。国内では、ブミプトラ政策によって安定と成長をはかる一方で、教育を通じて人材育成の努力を重ねてきました。多数派であるマレー人はイスラム教を日々の暮らしの参照点としていますが、主要3民族のほかに多彩な民族世界があり、また、近隣諸国出身の外国人も成長と多様化をもたらす存在としてマレーシア社会に欠かせない存在です。このように多種多様な人々が集まるマレーシアでは、いろいろなメディアを利用して意見の調整がはかられてきました。

「知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む」では、マレーシアの日常生活で見られるものごとを切り口に、多民族社会マレーシアの横顔を紹介します。

■生物と環境——豊かさを支える多様性

ドリアンと森の恵み (河合文)

お香はどこから来てどこへ行くのか (金沢謙太郎)

サラワク州の農山村の行方 (市川昌弘)

■歴史と社会——混成社会のかたちと成り立ち

変わるクアラルンプールの街角の風景：コロシウム・カフェ閉店 (宇高雄志)

■政治と経済——ブミプトラ政策という挑戦

チョウキット銃乱射事件と5・13事件の亡霊 (金子芳樹)

■イスラム経済——イスラムで世界の先導をめざすマレーシア

タブンハジとマレーシア：巡礼資金の預金とその運用 (上原健太郎)

■イスラムと宗教——日々の暮らしを支える参照点

マレー・ムスリムたちのクリスマス (多和田裕司)

■華僑・華人——寄せては返す中華世界の波

60年以上続いているマレーシアの文芸雑誌『蕉風』 (舩谷鋭)

■教育と研究——国際化と競争で人材育成

ウィズコロナ下の在外研究生活：クアラルンプール郊外にて (舩谷鋭)

■日本との関係

2022年に40周年を迎える東方政策 (杉田光彦)

1960年代の日本映画に描かれたマレーシア・シンガポール (松岡昌和)

1964年の東京五輪とマレーシア (福島康博)

このコラムは、JAMSの協力による『The Daily NNA マレーシア版』の月刊コラム「知識探訪——多民族社会の横顔を読む」(2021年3月～2022年2月掲載分)を再掲したものです。再掲にあたり表現を一部変更し、写真や図表は割愛しました。執筆者の所属先は原稿発表時のものです(原稿発表日は本文の末尾参照)。過去の記事はJAMSウェブサイトでご覧いただけます。

ドリアンと森の恵み

河合 文

ドリアンの季節がやってきた。2021年は、マレー半島東海岸地域の「果実の当たり年」のようである。特にドリアンを待ちわびていたのは、クランタン州に暮らすオランアスリ(先住民)「バテッ」の友人たちだ。彼らは森で得た資源の取引や狩猟採集によって生活しており、雨期は村に留まるが、雨期が明けて川の水が少なくなると「タマン・ヌガラ国立公園」の森に移動してキャンプをする。

公園内にはマレー農民の果樹園跡が複数存在する。果実の多い年には、彼らはそうした場所にキャンプし、ドリアンを食べて過ごす。森に溢れるのはドリアンばかりではない。ランブータンによく似たプラサン、爽やかな香りのランサツ、フタバガキ科タンポイの仲間など、硬い皮でみずみずしい果肉を覆った漿果類も多い。毎日のようにこうした漿果を食べため、皆の爪は果皮の汁で黒く染まる。

一方、ドリアンは食事としての役割も果たし、その日食べたのはドリアンだけだったという日も少なくない。ナイフの背でコンコンと叩いて良い音がすると食べごろだ。実を割って甘い果肉を取り出す。未熟なものは茹でて塩と味の素で味付けするとクリーミーな副食になり、竹筒に入れて蒸し焼きにすると、わずかに香ばしく、ほんのりと甘い。

熟しすぎたものは塩を加えて発酵させると、調味料トンボヤになる。川で捕った魚をこれで味付けすると、非常に美味なのだ。また種も茹でると、ホクホクとして、少しぬめりのある食感になる。栄養豊富なドリアンを食べて過ごすこの時期、多くの人は少しふくよかになる。

しかしマレーシアでは、毎年同じように結実があるとは限らない。四季のある日本と比べると、植物の営みは気まぐれな印象を受ける。果実の多い年も数年おきにしか訪れない。こうしたマレーシアの自然の「気まぐれさ」は、フタバガキ科を中心とする植物の一斉開花として知られてきた。

この一斉開花のあった年が果実の当たり年である。国際農林水産業研究センターと九州大学が中心になって行った研究によると、フタバガキ科の一斉開花は乾燥かつ低温という天候が続いた後に生じるといふ。マレー半島東海岸地域では、2月ごろ、北東モンスーン(季節風)から南西モンスーンに切り替わるころに雨のない日が続く。この時期の気温と雨の少なさが重要なのだろう。

条件が整った時、木々は花々をつける。ドリアンの白い花房も幹にポコポコと顔を出す。バテッのように森に依存した暮らしを送るオランアスリは、この花の季節に集まり、歌や踊りで結実を祈る慣習があった。そしてその際、多くの実がこの世界にもたらされるようにと、トランス状態のシャーマンが雷神から花を「盗んでくる」こともあったという。

現在ではこうした祭事はほとんど見られなくなったが、彼らにとって果実が重要であることに変わりはない。

特に重要なのはクワ科パンノキ属の果実で、街中で目にすることのある非常に大きな果実、ナンカ(パラミツ、ジャックフルーツ)もその仲間だ。これは料理にも使われるがインド原産である。一方、マレー半島原産でバテッのような集団が重視するのは、チェンパダと呼ばれるコパラミツや、ムンタワという、棘に覆われた、やや「小ぶり」の実をつける種類だ。バテッによると、神がこの世を創造する際に最初に生み出したのがこのムンタワだという。

ムンタワは未熟のものを茹でるか竹筒で蒸して食べる。加熱すると少し酸味があってホクホクしているが、全く甘くない。熟した果肉は甘そうなのに、彼らは見向きもせず捨てる。何とももったいないと思うのは、果実は甘いものという感覚にとらわれている私だけなのかもしれない。[2021.7.27]

(かわい・あや 東京外国語大学)

お香はどこから来てどこへ行くのか

金沢謙太郎

マレーシアの首都クアラルンプールにお香の専門店が目立ち始めたのは2000年に入ってからだろうか。ショッピングモールやスーパー、ホテルのロビー、雑居ビル、露店と至る所で目にする。店先の香炉から立ち上る香りで気づくこともある。店内のショーケースに並ぶのは各種の香水のほか、東南アジア産の香木だ。メインの商品はマレー語でガハル(gaharu)あるいは英語でアガーウッド(agarwood)と呼ばれる沈香である。

沈香とは熱帯雨林に生育するジンチョウゲ科ジンコウ属の樹木の樹脂で、加熱すると独特の芳香を発する。仏教やイスラム教、ヒンドゥー教などの宗教儀式の焚香料として使用されてきた。中国では、紀元前1世紀ごろから使用された記録があり、動悸や息切れなどへの薬用の効果も認められている。日本では、沈香を鑑賞する作法が整えられ、室町時代に香道が確立している。

沈香の値段は品質によりさまざまだが、上等なもの目は飛び出るほどだ。現在、クアラルンプールの専門店の顧客はもっぱらアラブ人ツーリストである。

沈香に興味を持ったのは、サラワク州の狩猟採集民プナン人の集落に住み込んで彼らの生活調査をしている時だった。沈香採りは数ある林産物の中で最も大きな収入源だった。知り合いに頼んで、沈香採りに同行した。何十匹ものヒルに噛まれてズボンの裾が真っ赤になって、ようやく1本見つけた。

ジンコウ属の樹木の生育密度は極めて低い。しかも、木があったとしても、沈香すなわち黒く樹脂化した部分ができている確率は10分の1もない。伐採や焼き畑など人の手が入っていると、ほぼ見つけられない。プナン人は樹脂の集積部だけを切り取って立木を残すという持続的な採集方法を行っていた。

しかし最近、サラワク州の奥地の森にも外部から侵入者がやって来て沈香の立木が乱伐されている。

こうした中、沈香はワシントン条約による規制対象種に指定され、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストに挙げられている。

沈香の国際取引について調べていた知人とシンガポールの間屋街を見て回ったことがある。シンガポールは沈香取引の一大中継地である。問屋の倉庫には東南アジアから集められた沈香がうずたかく積み上げられていた。ワシントン条約で求められている取引の書類は現場で確認できたが、各国当局や条約事務局の統計において沈香の産地や量が正確に把握されているわけではない。

マレーシア・プトラ大学のロジ教授の研究グループはジンコウ属の遺伝子配列の解析を通じて、地域個体群の検出を行っている。サンプル調査によって、マレー半島、東マレーシアのサバ州とサラワク州、カリマンタン(インドネシア)という産地の違いは明らかになっている。

ただ、現状では採集が禁止されている国立公園やブルネイの領土にまで侵入して採集してくる集団もいる。違法採集を防ぐためには、もう一段、詳しい産地情報や流通の履歴が求められる。

高級なものとはとても手が届かないが、沈香の香りにはいつまでも癒やされたい。お香の文化は熱帯雨林の保全や採集者の生活保障ともつながっている。それを守るにはどういう知恵や方法があり得るのか、関係する人々と共に探っていきたい。マスクを外せる日を心待ちにしながら。[2021.9.28]

(かなざわ・けんたろう 信州大学)

サラワク州の農山村の行方

市川昌広

私がマレーシア・サラワク州のイバン人の村に住み込みで調査を始めたのは、かれこれ30年近く前のことになる。当時は、大学院生だった。村では多くの住民が山の斜面の焼き畑や湿地で米を作っていた。米の収穫は2月頃から1か月間ほど連日行われていた。炎天下、早朝から日暮れまでの厳しい作業で、村に入ったばかりの私はそれに付き合っていた。

作業の合間に「この田んぼでの稲作は子どもが継ぐのか」と聞いてみた。私が住んでいた世帯には50歳前後の夫婦がいて、彼らには小学生の子どもがいた。当時、研究を始めて間もない私は文献から得た知識から、イバン人にとって稲作は生活の糧を得るためにも、精神的にも、大切な生業だと考えていた。

答えは当然、子どもが稲作を継ぐということだと予想していた。ところが彼らの返事は、「こんな泥まみれになって、もうかりもしない仕事を誰がするか。子どもには冷房の効いた事務所での仕事をさせたい」というものであった。

日本において私が村をしばしば訪れるようになったのは、高知県に来てからなので、ここ10年余りのことである。過疎・高齢化が進む高知県の山村で、高齢の村人からサラワク州での話と似たようなことを聞いた。

都会に出た50歳ほどの息子が会社を辞めて帰ってきたいと言っているという。親の面倒を見たいし、昔なつかしい故郷で田畑を作りながら暮らしたいらしい。その高齢の親は、息子に対して、「定年になるまでは会社に勤めろ。ここに戻っても仕事がない。年金がもらえるようになったら帰って来い」と言ったそうだ。息子は長男だったが、小中学校の頃から、ここにいても生活は苦しいと言いついて聞かせてきたのだとか。

3年前にサラワク州の村を再び訪ねると、かつて話を聞いた夫婦や彼らの子どもはいなかった。子どもは結婚して同州の都市ミリの

市街地に家を買って、すでに夫を亡くした妻は子ども家族とそこで同居していた。立派に成人した子どもは、冷房の効いた事務所で仕事をしていた。

一方、村の方では稲作を行う世帯は皆無になっていた。米はミリのスーパーマーケットで輸入米を買う方が安いからだ。村はミリから自動車まで30分ほどと近いので、村に残った多くの若者が自動車を買い、ミリへの通勤に使っている。

サラワク州でも、ミリから離れた村々では事情は異なる。自動車で伐採道路を使って3、4時間以上かかる所では、全体の半数以上、多ければ7割が空き家となっている村がぼつりぼつりと見られる。たいてい世帯を挙げてミリやその他の都市へ引っ越したのだ。残っている多くが高齢者だ。稲作は小さくなり、やめてしまった村もある。

サラワク州の農村は今後どうなっていくのだろうか。日本のように都市近郊ではある程度の人口が維持されつつ農業がほそぼそと行われ、都市から離れた所では過疎・高齢化がさらに進むのだろうか。

高知県の山村では、その生活基盤、社会や文化を維持し、再興しようと日々努力している人々が数は多くはないがいる。その動きを応援する都会暮らしの人々もいる。そういう人をサラワクでも時々見掛ける。例えば、私の知人は山の産物を都市に運んで売ったり、村に宿泊施設を建てて都市からの観光客を呼び込もうとしたりしている。自らが生まれ育った場所を興そうとしているのだ。

今後、地球の規模で農山村は過疎・高齢化の大きな流れの中に巻き込まれていくのかもしれない。その流れにあらがう動きにくみしていくのが今後の私の研究となろう。

[2021.12.27]

(いちかわ・まさひろ 高知大学)

変わるクアラルンプールの街角の風景——コロシウム・カフェ閉店

宇高雄志

マレーシアの首都クアラルンプールの目抜き通りにあったコロシウム・カフェ&ホテルが100年の歴史を終え閉店した。

1921年開業のこの店は、マレーシアでも長年にわたって営業しているコロニアル風のレストランとしても知られてきた。

熱せられた鉄板の上でソースが跳ねるステーキと、飛び散るソースを受け止める白いエプロンが愛らしかった。メニューは「コロニアルの遺産とハイナン（海南）料理」をうたう。

往時はクアラルンプールの人々は隣の映画館での映画鑑賞とコロシウム・カフェでの食事を楽しみにしていた。最初期にはドレスコードもある格式高い社交の場で、折に触れて国内外の情勢に関する議論が交わされていたようだ。

コロシウム・カフェの建物はアールデコ様式のショッパハウス（1階を店舗、2階を住居として利用する建物）。どっしりとした柱がファサード（建物の正面部）を構成し、ベランダウエイ（建物の道路に面した部分にある歩廊）には緩やかなアーチがかかる。正面は見かけ2軒分の広い間口があり、右側にレストラン、左側にカウンターを備えたバーがあった。内部でもこの2軒はつながっていて、行き来ができた。

入り口はマホガニー調のデザインで、両開きのドアが中央にある。薄く色の入ったすりガラスがはめられ、太い字体でCOLISEUM CAFE & HOTELと誇らしげに掲げられていた。玄関周りもインテリアも簡素なデザインだった。2階の宿は、マラヤ連邦時代から多くの旅人に愛されていた。

いよいよ閉店が決まると、コロシウム・カフェを愛する人々から惜しむ声が上がった。近年、ショッパハウスをはじめとする歴史的建造物は全国的に、単なる老朽化した建物としてのみならず、その価値が見直されている。シンガポールのチャイナタウンなどが観光地としての成功も後押ししているのかもしれない。

特に2008年に世界文化遺産となったベナン島とマラッカの市街地では、これまでならば取り壊されていた建物が法的に保全の対象となり、安易に取り壊されることがなくなった。これらがブティックホテルやカフェとして再生されていく。いまや投機の対象としても国内外から購入者が現れて高値で取引されている。

ただ、多くの元の居住者は家賃上昇に伴い市郊外に住まいを移してゆく。何代も続けられてきた商いも街角から消えてゆく。

戦前に建てられた不動産の賃貸価格を低く抑えていた「家賃統制令」(Control of Rent Act)が2000年に撤廃されたことで、戦前に建てられたショッパハウスを含め物件価格が上昇することもあるだろう。コロシウム・カフェも戦前に建築された建物で、この閉店も賃貸契約の満了に伴うものとささやかれている。

文化遺産保全の観点からは、古い建物が生かされるのはよいことだ。しかし利益を優先したからか、建物の修理が安易で丁寧でない例も散見される。安っぽいペンキが塗りたくられ、すぐに飽きられる。建物はそれを使う人々が丁寧に使い続けることで輝きを増すのに。

さてコロシウム・カフェであるが、クアラルンプール郊外で支店の営業が続けられている。閉店した本店の店舗がこの先どのように使われるのか気になるところだ。

ただ、クアラルンプールに住む人の反応は「古いコロシウム・カフェが閉店したのは残念だけれど、郊外の店の方が車もとめやすく良いのでは」とあっさりとしたものだった。

街の風景が、まるで軽業のように日々描き変えられるクアラルンプールでは、これぐらい潔くないと、この先の変化の波に乗り損ねてしまうのかもしれない。

さてコロナ禍が明けるとはいつだろう。そのとき、コロシウム・カフェのないクアラルンプールの街角は、どんなふうに見えるだろう。[2021.10.26]

(うたか・ゆうし 兵庫県立大学)

チョウキット銃乱射事件と5・13事件の亡霊

金子芳樹

2021年3月30日、1人のマレーシア人の死を伝える記事が現地各紙に掲載された。その人物はプレベット・アダム（アダム二等兵）ことアダム・ジャアファル。34年前の1987年10月18日にクアラルンプールのチョウキット地区で起きたライフル銃乱射事件の犯人である。

筆者は当時、この事件のニュースを留学先のマラヤ大学の学生寮のテレビで知った。キャスターの緊張した声と画面に映る武装警官の姿に、思わず身構えたことを覚えている。まさにマレーシア全土を震撼させるニュースだった。

同事件は、陸軍レンジャー部隊のマレー人兵士が軍装備品のM16ライフル銃を持ち出して起こした。夜半に発生した無差別乱射・殺害（1人死亡、2人負傷）と立てこもりは、それだけでも人々を震え上がらせるのに十分だったが、じつは国民の多くがこのニュースに息をのみ、身構えた理由は他にもあった。むしろ、その日に至るこの国の政治・社会情勢が、事件の一報による衝撃を増幅させていた。多くの国民の脳裏に「5・13事件」のイメージがよぎったからだ。

5・13事件とは、1969年5月13日に起きた「人種暴動」を指す。マレーシアは多民族が拮抗しながら共存する社会にしては大きな民族暴動は少ない国だが、同年の暴動は首都クアラルンプールを中心に数百人の死者（公式発表では196人）を出す歴史的な事件となった。

この暴動は、3日前の総選挙で華人系野党が躍進し、選挙後の連立の組み合わせ次第では与野党が逆転しかねない状況下で、主にマレー人と華人の非難合戦と示威行動によって緊張が高まる中で起きた。路上の小競り合いから火が付いた暴徒による衝突や放火が最も激しかった地区の1つがチョウキットだった。

それから18年後の1987年、同じチョウキットで銃乱射事件が起きた。しかもこの時のクアラルンプールは数日前から「5・13事件以来最高レベル」といわれる民族対立の緊張下にあった。発端は、政府が華語教育の廃止を狙っているのではないかとの疑念だった。華人が敏感に反応するこの問題に華人社

会が異例の結束を見せ、全国各地で数千人規模の抗議集会が開かれた。

それがマレー人社会の反発を買い、先兵ともいえる統一マレー人国民組織（UMNO）青年部が乱射事件前日に5,000人規模の集会を開いて華人批判の氣勢を上げていた。民族対立のムードはいや応なく高まり、さらに2週間後に数万人規模で開催予定のUMNO党大会に全国からマレー人党員が押し掛けて首都が反華人一色に染まる、といった風説が拍車をかけた。事件はそんな張り詰めた空気の中で起こったのである。

乱射事件が報じられると、5・13事件の再来を匂わす様々な噂が飛び交い、事件はそれを狙ったものとの話もまことしやかに流れた。テレビでは警察や政治家が噂を信じないようにと呼び掛けるが、それがむしろ不安を誘う面もあった。

クアラルンプール市内には重武装の警官隊が配備され、平日にもかかわらず街全体が閑散として、華人商店を中心に多くの店舗がシャッターを閉めていた。高台に登ると、暴動の勃発を恐れて首都から脱出しようとしているのであろう、人や荷物を満載した自家用車の列が郊外に向けて長く伸びているのが見えた。

クアラルンプールの日本人会からは、車で外出する際には華人と間違われぬよう日の丸を掲げるようにとの注意喚起もあった。民族や国籍を問わず、皆が緊張と恐れと祈りの中で過ごした1日だった。

警察の説得によってその日の午後には犯人プレベット・アダムは投降し、その後、彼は民族対立とは全く無関係であり、犯行はアモック（精神錯乱症状）によるものだった、との公式発表があった。事態は各方面の取り組みの末、発火点に達することなく終息に向かったが、あの時の緊迫感は忘れられない。

多様な民族の文化が織りなすカラフルで刺激にあふれたこの国の日常が、じつは危うい均衡の上に成り立っていることを思い起こさせる事件であった。[2021.5.25]

（かねこ・よしき 獨協大学）

タブンハジとマレーシア——巡礼資金の預金とその運用

上原健太郎

イスラム教徒（ムスリム）にとって、人生で一度はサウジアラビアの聖地メッカへ巡礼することが宗教的義務とされている。東南アジア地域はメッカから遠方であり、巡礼を行うに当たっての旅費や留守宅を支える費用が、多額に及ぶことになる。

従って、イスラム教徒の多くは、日々の生活の中で巡礼用の資金を積み立てなければならない。マレーシアでは、半世紀以上にわたって、タブンハジ（巡礼基金、TH）と呼ばれる基金が、この資金管理のニーズに応えてきた。

タブンハジという基金の成り立ちは、1962年の巡礼貯金基金公社（PWSBH）の設立にまでさかのぼる。この公社はマラヤ大学のウンク・アブドゥル・アジズ教授によって提唱され、マレーシアで初めて導入されたイスラム金融機関として位置付けられている。1969年にこの公社は巡礼管理局と合併し、巡礼管理積立基金（LUTH）となった。

運営開始当初の1963年時点で、タブンハジの預金者数は1,300人弱ほどの規模であったが、2018年には約912万人に達した。預金残高は約754億リング（約1兆9,600億円相当）に上り、1人当たり平均では8,200リングとなっている。現在、巡礼に必要な費用は1人当たり約2.3万リングと推定されているが、タブンハジは、初めてメッカ巡礼を行う者に限って約1.3万リングの補助金を出している。

タブンハジで預金口座を開くに当たっては、イスラムの教えに基づいて利子の取得を

回避しなければならない。そこで代理契約が採用されており、タブンハジは預金者からの任命を受けたエージェントとして、彼らの資金を管理することとなっている。また、出資業務は預金と並ぶタブンハジの主要な活動と位置付けられていて、そこで得られた利益は、そのパフォーマンスに応じて預金者に還元される。

タブンハジの出資業務の中で拡大しているのがサービス業であり、特に宿泊業やIT分野で新しい動きを見せている。タブンハジの子会社であるTHホテル・アンド・レジデンス（THHR）社は、マレーシア国内で5つのホテルを管理しており、提供されるサービスについてシャリアコンプライアンス（イスラム法の順守）を重視することでユニークな付加価値を示している。

また、同じく子会社のシータ・エッジ社は、ビッグデータ解析や病院情報システムの構築などITソリューション事業に従事している。

タブンハジは、半世紀以上にわたってウンマ（共同体）の経済的成功を目標に掲げながら、マレーシア国内のイスラム教徒に向けて巡礼費用の資金管理を担ってきた。その活動の一方で、発展が見込まれる新たな産業分野に出資を行う点でもマレーシア国内で存在感を発揮してきている。今後、資金管理と出資を通じてマレーシア経済を形成する存在として、タブンハジの動向が注目される。

[2021.8.30]

(かんばら・けんたろう 京都大学)

マレー・ムスリムたちのクリスマス

多和田裕司

仕事柄、学生たちにマレーシアについて話をする機会が多い。そんなときに見せた一葉の写真に学生から興味深い反応が返ってきた。それは、「厳格な」教えであるイスラムに帰依するムスリムたちが、なぜクリスマスを楽しんでいるのかという素朴な質問だった。

例年この時期になると、多くのショッピングモールで盛大なクリスマスデコレーションが飾り付けられる。2020年、2021年と、新型コロナウイルスの影響でマレーシアを訪問することがかなわずにいるが、インターネット上の映像などを見るとクリスマスのデコレーションは健在に見える。家族連れやカップル、観光客など多くの人が思い思いにクリスマスを楽しむ姿は、今やマレーシアの風物詩といえるかもしれない。

マレーシアはイスラムを国教とし、ムスリムが人口の過半数を占める国である。そんな中で、なぜクリスマスが盛大な行事となっているのであろうか。マレーシアが多民族、多宗教の国であることや、マレーシアのイスラムが「寛容」であるといったことも、この問いへの答えとなり得るかもしれない。

あるいは、マレーシアでも SNS でのやりとりがとて盛んであるが、クリスマスの飾りは映画のようなファンタジックな背景として格好の「映え」要素であるからということも考えられるし、クリスマス行事が宗教行事ではなくイベントとして受け取られている可能性も答えの1つであろう。

このようなクリスマスの風景に対して苦言を呈する人々が一定数いることも事実である。いわく、ムスリムは「メリークリスマス」という言葉を用いてはいけない、サンタクロースの赤い帽子をかぶってはいけない、クリスマスは西洋の価値観を浸透させる等々、イスラムを厳密に捉える（捉えたい）人々からすれば、イスラムと他宗教との境界が薄れたり、乗り越える人が出てきたりするような事態には常に警戒的であらねばならないのであろう。

しかしそのような批判も、クリスマスの「楽しさ」の前には霧散してしまっているようにみえる。

筆者がマレーシアに関わりを持つようになって30年以上になるが、この間に大きく変わったことが2つある。

1つは人々を取り巻く物理的環境とでもいえるもので、住居や交通網、コミュニケーション手段などにおける変化である。カンポン（田舎）に暮らし農漁業を営むマレー系といったステレオタイプはもはや消滅し、大都市郊外の住宅地から軽量高架鉄道（LRT）や都市高速鉄道（MRT）を利用してスマートフォン片手に通勤する姿こそが、いまのマレー系の現実であろう。

もう1つの変化は、自由と民主主義、個人の尊重と平等、多様性の擁護など、言ってみれば現代世界に「普遍的」とでもいえる価値観の広がりや定着である。もちろん、これらの価値観の浸透具合は人によって様々であろうし、過去にこれらの価値観がなかったというわけでもないだろう。しかし、今や多くの人々に共有されていると言って過言ではない。

これら2つの変化は、一言で言えば外面、内面の双方において現代世界に共通するものの広がりやみることができるといえる。その結果もたらされるものは、われわれと（同時にそれはある程度の経済力を有する世界の人々と）同じような意識や行動や生活様式にほかならない。

筆者には、クリスマスを楽しむムスリムの姿こそが、多様なものの共生や社会の豊かさといった、世界が目指すべきゴールを示しているように感じられる。教義のみに着目すると、われわれからは「厳格」で近寄りたく感じられるイスラムも、一人一人のムスリムの実践を見ると、ムスリムもまた自分たちと同じ現代世界に生きる「人」であることが理解されるのではないだろうか。[2021.11.30]

（たわだ・ひろし 大阪公立大学）

60年以上続いているマレーシアの文芸雑誌『蕉風』

舛谷 鋭

言語を問わずプロ作家がほとんどいない東南アジアの文壇において、奇跡的に60年以上続いているマレーシアの中国語文芸雑誌『蕉風』(Bulanan Chao Foon)は2020年中に発行がなく心配されたが、514号が同年12月付で2021年初に発行された。

日本には1904年創刊の『新潮』などの文芸誌もあるが、『蕉風』は1999年にいったん休刊した際に「出版史上最も長く続いている中国語文芸雑誌」と報じられたことの実偽はともかく、東南アジアはもちろん、中国本土、台湾、香港、マカオなど兩岸四地を含めても、中国語で現存している文芸雑誌としては、かなり古い方ではなかろうか。

1955年に方天(本名:張海威)の主編で登場した『蕉風』はシンガポールでの発行ながら、当初香港でも読まれていた。張海威という名に聞き覚えのある向きもあるが、毛沢東に追われた中国共産党の有力者、張国壽の実子である。大陸以外の中国語文壇で屈指の長篇作家である黄崖、1999年まで物心ともに支え続けた姚拓ら、主に香港経由で東南アジアに「南下」してきた『学生週報』ゆかりの華語系華人(サイノフォン)作家たちによって、最初の40年で土台が築かれた。

1950年代末には発行地をマラヤ(現マレーシア)に移し、その後も中国語を非国語とする地域では最も充実したマレーシアの華文教育制度に支えられ、華人の民族文学の発表の場として主に現地華人の投稿によって成り立ってきた。マレー文学やインドネシア文学など東南アジアの他民族の文学や、台湾文学、中国現代文学の紹介の場でもあり、「現代派」と呼ばれるモダニズム作家の牙城でもあった。

『蕉風』は留台(台湾留学)組を中心に、マレーシア華人を主な読者としており、常に新しい血を入れ続けた編集陣は『星洲日報』など華字紙の文芸欄担当者の養成の場ともなっていたが、アジア通貨危機に伴うマレーシア経済低迷の中、1999年2月に休刊した。

創刊当初から毎号1,500リング、1990年代末には毎号6,000リングの赤字を出し続けた公称2,000部の文芸雑誌が生き長らえたのは、実業家としても成功した華人作家らの無償の庇護によるもので、積み重なる損失に耐えられなくなったのは当然の成り行きかもしれない。

2002年12月にはジョホール州ジョホールバルの華人系カレッジである南方学院(12年からユニバーシティーカレッジ)内の馬華文学館で、489号からの復刊が始まった。当初は年2回発行を目標としていたが、2004年、2008年、2010年、2012年、2013年、2015~19年は年1回となった。前述の通りコロナ禍で20年分は21年初に514号として発行された。

『蕉風』を創刊号から揃いで持っているのはジョホールバルの馬華文学館とシンガポール国立大学中文図書館だが、所蔵調査中に欠号を照らし合わせたところ、両館が寄贈交換すればよいことに気づき、両者の間を橋渡しできたのはよい思い出。

日本ではマラヤ大の呉天才蔵書(Goh Collection)を立教大学図書館で購入した時に混ざっていた分と、姚拓氏から託された分、そして個人所蔵分を寄贈した分を合わせて、1966年の発行分から欠号ありだが488号までの一部がある。南方学院に発行が移管された後は内山書店に日本国内での代理店をお願いし、立教大学新座図書館で購読している。京都大学図書館でも収集を開始したと聞く。

クアラルンプールのスランゴール中華大会堂内の華社研究センター集賢図書館にも姚拓氏からの寄贈分などがあったかと思うが、揃いにはほど遠かった。スランゴール州カジャンの新紀元大学学院の陳六史図書館の方が近年、方修文庫や李錦宗蔵書など文芸資料の収集を進めており期待できる。[2021.4.27]

(ますたに・さとし 立教大学)

ウィズコロナ下の在外研究生活——クアラルンプール郊外にて

舩谷 鋭

私のキャリア最後の在外研究はロックダウンと重なった。2021年秋に渡航を予定したが、2020年3月から観光客の入国は禁止され、渡航前のビザ取得が必須だった。

ジョホール州、ペナン島などの大学に受け入れ打診したが、コロナ下オンラインで、入国管理局に説明するのが難しいと渋られ、9月中を見込んでいた渡航は1カ月以上遅れた。そうするうち新型コロナウイルス対策の規制緩和が進み、10月半ばからワクチン接種完了者の入国時隔離が1週間に短縮された。

受入のカジャン・新紀元大学学院が機敏に動いてくれたので、日本からオンラインで完結できるはずのビザ手続きを行った。しかし出入国申請システム「マイトラベルパス」で申請を完了しても、入国手続きを効率的に進めるための「マイセーフトラベル」につながらず、結局大使館で一時入国ビザを取得し、11月によりやくクアラルンプールでホテル隔離を始めた。

実は隔離終了後も1週間弱、新型コロナ対策アプリ「マイスジャテラ」上の表示は赤信号のままだった。よくあることのように、施設に入るにはQRコードをスキャンして青信号を見せないと、守衛の検問に引っかかる。

数日後には2年ぶり開催となるマレーシア旅行業協会(MATTA)フェアが控えていたが、入り口のノートに携帯番号と名前を書けば入れることもあるので、公共交通機関を乗り継いで世界貿易センターへ駆け付けた。

体温測定などに応じると無事入館でき、MATTAフェアを見て回ったが、9月に始まったランカウイ島の「トラベルバブル」情報は見当たらず、海外ブースも日本や台湾、トルコなどごくわずか、国内も全13州のうち7州のみで期待外れだった。しかし、例年通り国内旅行の商品を買いあさるマレーシア人が見られたのは、コロナ禍からの夜明けを思わせる光景だった。

私のいる大学は元スランゴール憲兵隊本部

跡地にあり、敷地は狭く、入構時に身分証明書の確認とマイスジャテラによるQRコードのスキャン、非接触での体温測定と手指消毒のフルコース必須だ。一方、時折訪れる国立大の広いキャンパスでは入構時のチェックはなく、各建物でのスキャンのみで、学内食堂の再開も早かった。

年末が近づくと、大学寮には学生が戻り始め、少しずつキャンパスもにぎやかさを取り戻した。年明けにクラウド経由で提供される「CloudTheatre」でのオンライン公演のため、学生演劇の大道具の準備や稽古も始まった。

教員はキャンパスへの出講を減らし、まだオンラインのようだったが、職員はおおよそキャンパスで仕事を始めていた。身の回りに陽性者が出ることもなく、軽度接触者の存在は耳にしたが、年末は誘われるまま南部ジョホール州や北部プルリス州へ国内旅行にも赴いた。

施設入り口でマイスジャテラによるQRコードのスキャンや消毒をする人のほか、個人で消毒液を持ち歩く人もいて、公共交通機関で座席などに吹きかける姿や、二重マスクも目に付いた。

タイプーサムはバトゥ洞窟で「カバディ」以外の行事は通常通り実施された。春節は元新村地域など華人居住区では爆竹が鳴り響き、大みそかから三が日と九日目の天公祭など、毎晩どこかで花火が上がっていた。シンガポールとの間で隔離なし入国を認める「ワクチントラベルレーン」(VTL)が始まり、2年間帰郷できなかったマレーシア人たちも戻ってきた。

マレーシアのウィズコロナはまだ続くが、アフターコロナならぬ新常态として、ワクチン接種とともにこの生活が続いていくのかもしれない。[2022.2.22]

(ますたに・さとし 立教大学)

2022年に40周年を迎える東方政策

杉田光彦

マレーシアの東方政策 (Look East Policy) は、日本等への留学や研修を通じ、労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等を学んで、マレーシアの経済、社会の発展に役立てようとする政策であり、もうじき40周年を迎える。

1981年7月に56歳で第4代首相(1981~2003年)に就いたマハティール氏は、同年12月、各国に駐在するマレーシア大使をクアラルンプールに招集して大使会議を開催し、外交方針等に関する訓示を行った。この席でマハティール首相は、「Look East」との言葉を用いつつ、マレーシアの経済開発モデルとしてより適合的なのは(欧米ではなく)日本等である旨を述べた。

翌年の2月8日には、日本とマレーシアの経済界の代表等から成る日本マレーシア経済協議会(MAJECA・JAMECA)の第5回会議が、マハティール首相出席の下で開催され、同首相より東方政策の実施が発表された。

当時マレーシア政府内で同政策を担当したのは首相府であり、担当大臣はこの二十余年後に第5代首相になるアブドラ首相府相であった。同政策導入期の中曽根康弘首相(当時、故人)は、1983年5月にマレーシアを訪問し、マラヤ大学内に設置された日本留学準備のための特別コース(AAJ)を訪れた。2日間のマレーシア滞在中、随員大臣として同首相を案内したのもアブドラ氏であった。

アブドラ氏の夫人の祖父母が長崎の島原からキリスト教宣教のためにマレーシアを訪れ滞在中の日本人であったことや、アブドラ氏の娘婿であるカイリー・ジャマルディン科学・技術・革新相の実父は元駐日マレーシア大使であり、幼少期の5年間カイリー氏が父親と共に日本に滞在していた事実は興味深い。

筆者の在マレーシア日本大使館勤務は2001~04年に次いで今回2度目である。前回勤務時、東方政策下の日本留学経験者は、第1期生が日本の大学を卒業してから20年弱であり、日本での教育や経験を生かしマレーシア各界の中堅として活躍する人物は多数いたが、指導的地位を占めるまでに至った

人物は限定的であった。

しかし、2019年7月に再びマレーシア勤務となり、良い驚きであったのは、東方政策に基づく日本への留学生の累計が約9,000人、更に別途国際協力機構(JICA)等で研修を受けた方が約1万9,000人に上る中、各界で活躍し指導的地位に就く日本留学・研修経験者がそこかしこに存在することであった。

連邦政府では、財務省、教育省、高等教育省、保健省、地方開発省および農業省の6省の次官および人事院長官が日本留学経験者であり、また、少なくとも環境・水省および住宅・地方政府省の2省の次官が日本での研修経験を有する。民間では、自ら起業して日本とマレーシアの経済関係強化に資するビジネスを展開するケースが特筆されるが、日本企業においても一層活躍することが期待される。日本の長所を会得した人材を更に増やそうとする注目すべき動きも続く。日本に長期滞在せずとも日本から学べるようにする試みとして、日本式工学教育をマレーシアで提供するマレーシア工科大学傘下のマレーシア日本国際工科院(MJIIT)が11年に開学。更に、日本の国立大学の分校をマレーシアに設置する計画が現在進行中である。

日本とマレーシアは、22年を東方政策40周年と位置付け、関係団体や企業等とも協力の上、マレーシア全土でさまざまな関係事業を実施する計画である。これらの実施を通じ、これまでの東方政策の功績が改めて周知されるとともに、将来に向けた同政策の意義が再認識され、一層強固に同政策が継続されていくことが望まれる。

このような人材育成の効果が大きく発揮されるためには、過去40年のような関連施策の長期実施が必要であり、その効果の維持、拡大に向け、そのたゆまぬ継続が重要である。(本稿の内容は筆者個人の意見であり、所属機関の見解を代表するものではありません。)

[2021.3.30]

(すぎた・みつひこ 在マレーシア日本大使館)

1960年代の日本映画に描かれたマレーシア・シンガポール

松岡昌和

新型コロナウイルス感染症の広がりによって、国境を越えた往来が厳しく制限される中、映画の中の世界は、異文化を疑似体験できる場の1つとなっていると言えよう。近年の日本でもマレーシアやシンガポールを取り上げた作品が制作されており、それらを鑑賞することで、疑似的にそれらの国を訪問することができる。

特に娯楽作品では、マレーシアやシンガポールの各都市やリゾート地、あるいはフォトジェニックなスポットがふんだんに取り上げられている。映画で表現される外国は、その時々観客の欲望と切り離すことはできないだろう。

筆者はもともと日本占領期のシンガポールを研究対象としており、その延長で現在は戦争の記憶について関心を寄せている。そのような中、1960年代のマレーシアとシンガポールを舞台とし、さらに戦争の記憶も盛り込まれた映画作品があると知り、調べ始めている。

その作品とは、市村泰一監督、橋幸夫主演の歌謡映画『シンガポールの夜は更けて』（1967年、松竹）である。これは、独立（1965年）直後のシンガポールと隣接するマレーシア・ジョホール州を舞台として、橋演じる主人公が犯罪組織に立ち向かう物語であり、さらに由美かおる演じる華人女性との恋愛模様も描かれる。

マレーシアとシンガポールにおける戦時期の日本占領から20年ほどたった1960年代後半に、戦争の記憶がどのように語られ、両国が日本の視点でどのように描かれているのかについて、筆者は関心を持った。

そのタイトルにもあるように、物語はシンガポールを中心に展開され、所々で戦争の痕跡を見ることができる。

橋演じる主人公は戦争を経験していない世代という設定であるが（橋自身、1943年生まれである）、父親が戦時期にシンガポールに渡って現地華人女性との間に娘をもうけており、そのまだ見ぬ妹が失踪したとの知らせを聞いて、シンガポールに渡る。主人公は

シンガポールで妹の手掛かりを求めるが、そこで戦争の経験が障壁となる。戦争によってあらゆる記録が消えてしまい、妹の手掛かりはなかなかつかめない。

その後、ふとしたことをきっかけに主人公はジョホール州に妹の手掛かりがあると知り、現地に向かう。そこでも現地の戦争経験に直面する。妹の生家を探してマレー人村落を訪問した主人公だったが、そこで日本人の姿を見たマレー系の女性が激しい剣幕で主人公に怒りをぶつける。その女性は日本人の手によって両親を失ったという。主人公は行く先々で日本占領の記憶や戦争の傷跡に直面する。

それに対する主人公の反応は驚くほどあっさりしたものである。マレー系女性になじられても、ひどく困惑することもなく、また怒りや悲しみを浮かべることもない。「ここにはああいう人もいっぱいいるんだろうなあ」とつぶやくだけで、反論もしなければ、戦争加害の責任を考えることもない。

それは、シンガポールで失踪中の妹についての記録が戦争によって消失してしまっている事実を前にしても同じである。橋演じる主人公は、たとえ戦争の経験や傷跡を眼前に突きつけられても、どこか人ごととしてとらえている。

劇中、戦争の傷跡や日本占領の記憶は、その多くがシンガポールやマレーシアのこととして語られる。戦争終結から20年以上が経過し、日本が冷戦体制の下で急速な経済発展を遂げていく一方で、シンガポールやマレーシアは政治的にも十分に安定しているとはいえず、戦争の傷は戦後の政治的不安定さの中で残り続けてきたと言えよう。

映画の中で、シンガポールやマレーシアは南国のエキゾチックな場所として描かれただけでなく、戦争の傷跡をいまだに抱える「他者」として表現されている。これもまた、この時代に日本が東南アジアの国に求めたイメージなのであろう。[2022.1.25]

（まつおか・まさかず 大月短期大学）

1964年の東京五輪とマレーシア

福島康博

東京オリンピックの開催まであと1カ月に迫った。無事実施されれば東京では2回目の夏季五輪となるが、57年前の東京オリンピックにマレーシアはどのように臨んだのだろうか。当時の報道を中心に振り返ってみたい。

前回の東京大会は1964年に開催されたが、この年はマレーシアにとっては多難な年であった。前年の1963年9月、マラヤ連邦にサバ、サラワク、シンガポールが加盟してマレーシアが誕生した。そのため「アジアでもっとも若い国」という触れ込みで東京大会に参加することになった。

ところが隣国インドネシアが、マレーシアの発足は英国の新たな植民地化政策だとして反発、フィリピンはサバの領有権を主張するなど、発足早々、周辺国との対立が生じた。国内に目を転じると、インドネシア人ゲリラによる戦闘が発生する一方、シンガポールでは華人とマレー人との対立が表面化した。

マラヤ連邦に加入した各地域の五輪事情を見てみると、まずシンガポールは、前回1960年のイタリア・ローマ大会にシンガポール自治州として参加し、重量挙げで銀メダルを獲得した。東京大会ではマレーシアの一部として参加したが、次の1968年メキシコ大会からは独立国シンガポールとして参加している。

サラワクは、単独での五輪参加の経験はなかったものの、1962年にインドネシアで開催されたアジア大会などの国際大会では、英領サラワクとして出場したことがある。そしてサバは、前々回56年のオーストラリア・メルボルン大会に北ボルネオとして2人の陸上選手が出場したことが唯一の五輪参加であった。

これらにマラヤ連邦を加えた4つの五輪委員会は、1964年5月にマレーシア五輪委員会として統合され、後に首相となるラザク副首相が会長に就任した。

聖火リレーはマレーシアでも行われた。ギリシャで採火された聖火はユーラシア大陸を西から東へと横断したが、9月2日にタイカ

ラクアラルンプールへ空路で到着、市内で聖火リレーとともに記念行事などが催された。一夜明けた3日午前10時には、次の中継地点であるフィリピンへと同じく空路で渡った。

マレーシア選手団は62人を数えた。これは、現在に至るまで歴代最多を誇る。選手団が膨れ上がったのは、1つはホッケーや自転車のトラック種目といった団体競技に出場したこともあるが、もう1つは「あちらの州が選手を出すならうちの州からも」という声に配慮した結果だったようだ。選手団の中でも注目されたのが、シンガポール出身の女子水泳モリー・タイ選手で、当時小学6年生の12歳と、東京大会の全出場選手の中で最年少だった。

サバ州初代州首相のフアド・ステファン氏を団長とする選手団が選手村に入村した際、国旗をひときわ高く掲げたという。当時の報道によれば、新興独立国の国民が旗の下に結束しているのだと、日本人スタッフは感じ入ったという。

10月10日の開会式では、サラワク州の男子陸上クダ・ディッダ選手が旗手を務めた。大会期間中、マレーシア選手が泊まる宿舍の備品が燃えるほや騒ぎが起きたものの、当の選手は富士山に旅行中で留守だったという不審な出来事もあったようだ。メダルには届かなかったものの、東京オリンピックへの参加は同国のスポーツ振興と国民統合に貢献した。

その後であるが、マレーシアは1992年スペイン・バルセロナ大会でのバドミントン男子ダブルスで、念願のメダル(銅)を初めて獲得した。他方、独立したシンガポールは、10代の若手選手を対象とするユース五輪の2010年第1回大会の開催国となった。

今大会、マレーシア選手団はどのような活躍を見せるのか、期待が高まってきた。

[2021.6.29]

(ふくしま・やすひろ 立教大学)